ウィトゲンシュタインにとって言語ゲームの外側を想定することはどのような意味を持つことだったのか

石田恵理(武蔵野大学)

ウィトゲンシュタインは、最晩期の思考をまとめた『確実性の問題』(Wittgenstein 1969)において、独特な信念を持つ人々を登場させている。92 節で描写されている、自分で雨を降らせることができると信じている人や、世界が自分と一緒に始まったと思いこんでいる王様は、我々が正しいと信じている科学の体系とは一致しないような独特な信念を持つ人の例だと言える。また、106 節に登場するような、『確実性の問題』が書かれた時点での科学技術では不可能だった、月に行くということについて、自分は行ったことがあるという事実とは言えないような発言をする人についてもそれに含めることが可能だと考えられる。

一方で、『ウィトゲンシュタインの講義　数学の基礎編　ケンブリッジ 1939 年』(Diamond 1976)第 21 講においては、相手が合理的に振舞っているといえるのか我々に疑いが生じるようないくつかの例があげられている。第 21 講に含まれているのは、偵察部隊から「3 万人の敵がいて、かつ、4 万人の敵がいる」という矛盾するような報告を受けているにも関わらず再偵察を命じない将軍、薪を一定の高さで積み上げた際の底面積に基づいて売買をしているはずが高さを変えて取引をしようとする人々、「||||||||」と 9 本並んだ棒の列について、3 が 4 回繰り返されていると数え、3 人に 4 本ずつ分配しようとする人々などである。これらの場合については、上記のような言動を可能にするどのような信念を相手が持っているのか、我々に疑いが生じる例として捉えられていると言うことができる。

『確実性の問題』における、月に行ったことがあると発言する人については、冗談を言っている、夢をそのように解釈する慣習を持っている等、そのような発言と我々が正しいと信じていることとの間の乖離を埋めることできるような解釈が示され、『ウィトゲンシュタインの講義　数学の基礎編　ケンブリッジ 1939 年』の例についても、一方に 3 万人、他方に 4 万人の敵がいると理解している場合を考える等、その将軍が矛盾することを認めるような人だと理解するのを回避できる解釈が提示されている。

それでは、ウィトゲンシュタインにとって、事実とは一致しない発言や矛盾を認めるかのような言動を行ない、不合理と言えるような独特な信念を持っているのでは、という疑いを持たせるような人々を想定し、それに対して我々が正しいと信じていることと矛盾するようなことに基づいた言動ではないと捉えることが可能な解釈を与える、このような試みはどのような意味を持っていたのだろうか。

本発表では、この問題について、ウィトゲンシュタインと観念論との結びつきをどう解釈するのかという点から考察していきたいと考えている。なぜなら、ウィトゲンシュタインが不合理と言えるような独特な信念を持っているのでは、という疑いを我々に持たせるような人々を思い描くことによって明らかにしようとしていたことについては、その点から既にある程度議論がなされていると捉えることが可能だからである。具体的には、ウィトゲンシュタインと観念論の間に繋がりを見出すことに反対する立場(Cerbone 2011)と、その立場によってウィトゲンシュタインと観念論の結び付きを見出しているとみなされている立場(Lear 1982)を中心に、検討を進めたいと考えている。デイヴィッド・R・セルボーンによれば、ウィトゲンシュタインをある種の観念論者とみなす解釈者達は、ウィトゲンシュタインの「生活形式」という用語の使用、言語ゲームの外側について話すことにあたる哲学的な問いの却下に基づいて解釈を行っている。その点から、この問題は、ウィトゲンシュタインの前期の著作『論理哲学論考』(Wittgenstein 1922)において、我々はそれについて沈黙していなければならないと示された「語りえないもの」についての考察が、その後ウィトゲンシュタイン自身にとってどのように受け止められるようになったのかを検討することに関わっていると言うことができる。

ウィトゲンシュタインと観念論の結びつきを見出す立場に関して問題となるのは、言語ゲームの外側について話すことを却下するというウィトゲンシュタインの立場を受け入れ、我々が自らのものとは異なる生活形式について理解したり、考えたりすることはできないと捉えている一方で、「生活形式」には(自分とそれとは異なる生活形式を分ける)境界が含まれていたとみなしていることで、何らかその境界を越えたもの、我々の生活形式によってアクセスできないものがあるというイメージを引き起こしてしまうことを避けられなくなっている点であると言える(Cerbone 2011, p.315)。この点については、さらに、合理的に振舞っているといえるのか、不合理と言えるような独特な信念を持っているのではないかという疑念を我々に持たせるような人々の想定が、どのようなものとして描写されているかについての注目も必要であると考えられる。なぜなら、上記の、月に行ったことがあるという発言をする人や「3 万人の敵がいて、かつ、4 万人の敵がいる」という報告を受け入れる将軍の場合については、疑いを持つことを避けることができるような解釈を提示することは容易だが、場合によっては、それが困難であると考えられるからである。

本発表では、ウィトゲンシュタインと観念論の間に繋がりを見出す立場とそれに反対する立場のそれぞれについて解釈を整理し検討することを通じ、我々が理解したり考えたりすることのできないような生活形式を持つのではないかと思わせる人々を描写することで、言語ゲームの外側を想定することがウィトゲンシュタインにとってどのような意味を持っていたのか明らかにすることを目指したい。

Cerbone, D. R. (2011). Wittgenstein and Idealism. In O. Kuusela & M. McGinn (eds.), *The Oxford Handbook of Wittgenstein* (pp.311-332). Oxford: Oxford University Press.

Diamond, C.(ed.) (1976). *Wittgenstein's Lectures on the Foundations of Mathematics, Cambridge, 1939*.Chicago: The University of Chicago Press. (『ウィトゲンシュタインの講義　数学の基礎編　ケンブリッジ 1939 年』大谷弘・古田徹也(訳)、講談社、2015 年。)

Lear, J. (1982). Leaving the World Alone. *The Journal of Philosophy*, 79 (7),382-403.

Wittgenstein, L. (1969). *On Certainty*. G.E.M. Anscombe & G. H. von Wright (eds.), Oxford: Blackwel. (『確実性の問題』(『ウィトゲンシュタイン全集　第 9 巻』所収)黒田亘(訳)、大修館書店、1975 年。)

—.(1922). *Tractatus Logico-Philosophicus*. London: Routledge. (『論理哲学論考』野矢茂樹(訳)、岩波書店、2003 年。)